栗山学び隊　No.47

地域で輝く介護福祉学校と栗山高校に通う皆さんの様子をお届けします

地域での学び、いざ２年目へ

田中（たなか）　愛桜（あいら） さん（介護福祉学校２年）

芦別市出身の田中さん。中高生時の職業体験や本校卒業生の母親の影響もあり、介護の道を志しました。

「色々なことがあった1年でした」と振り返り、勉強、ボランティア、介護施設での実習、初めての一人暮らしなど、大変なことがありながら多くの経験ができたと話します。

中でもボランティア活動は、自分が成長したきっかけとのこと。「もともと地域活動に積極的に参加するタイプではありませんでした。入学を機に成長したいと思い、多くの活動に参加しました。小学生の学習支援、高齢者向けのタブレット講座など、町の温かさを感じる経験でした」と話します。

今月から2年生となった田中さん。「夢は母と一緒に働くことです。今後も町の方々と関わり、介護の学びを深めていきたい」と話していました。

”栗校らしさ”を新入生たちにも

稲田（いなだ）　小桃（こもも） さん（左）・**佐藤（さとう）　夏珠茄（かずな）** さん（右）（栗山高校３年）

生徒会役員を務める2人。4月の「新入生歓迎会」の準備の真っ最中だと話します。

「今年はインパクトのある企画を予定しており、とにかく新入生に楽しんでほしい」と話し、動画共有アプリTikTokを用いた動画公開や工夫を凝らした先生の紹介企画などを検討中とのことです。

「楽しい雰囲気であふれている栗高らしさを感じてほしい」と話す佐藤さん。稲田さんは「いい意味で真面目過ぎないのが栗高の良さ。早く馴染んでもらえれば」と話します。

令和5年度を振り返ると「時間がとても早かった」と話す二人。「コロナの制限がなく、栗高での日々を思いっきり楽しめた一年でした。後輩たちもたくさんのことを楽しんでほしい」と言います。

今月で3年生となった二人。「充実した日々を送れるように、今後も生徒会としてみんなをまとめていきたい」と話していました。

皆さんの悩み、お聞きします

ケアラーの窓から Vol.27

ケアラー支援 一人でも命を救う 地域の支え合い

Profile

栗山町社会福祉協議会ケアラー支援室

参与　吉田（よしだ）　義人（よしひと） さん

町職員として40年以上にわたりまちづくりに携わり、退職後、社会福祉協議会の事務局長や特別養護老人ホーム「くりのさと」施設長などを歴任。76歳を迎えた現在も、町のケアラー支援の普及に奔走している。

――町のケアラー支援の歴史は、社会福祉協議会（以下、社協）による平成22年のケアラー実態調査が始まりです。今回は、当時の社協事務局長をつとめていた吉田義人さんにお話を聞き、当時の話や今後についての思いを取材しました。

現実を知った実態調査

当時、日本ケアラー連盟の実態調査として町内でアンケートを行いました。全国5カ所で行う調査でしたが「福祉のまちづくりを行う栗山で調査したい」とのことで依頼を受けました。

その後、全戸調査とケアラーへのインタビューを行い私も調査に同行しましたが、その声を聞いて大変ショックを受けました。「家族関係の葛藤」「将来に希望が持てない」などのケアラーの声により、町内のリアルな実態を知ることとなりました。

調査をもとに、今後社協としてケアラー支援を明確に推進していこうと考えました。これが、令和3年にケアラー支援条例を町で定めるきっかけです。

仲間がいたから今がある

町職員時代は、社会教育主事として多くの町民の皆さんと関わってきました。

ケアラー支援の活動の場でも、社協で取り組んでいる「いのちのバトン」「ケアラーズカフェ」など、多くの仲間に恵まれながら推進していました。当時の皆さんは現在もボランティア団体やケアラーサポーターなどで活動しており、町民の皆さんがあっての今だと思っています。

地域全体での支え合い

最近「ヤングケアラー対策」という言葉も注目されていますが、ケアラー支援は子どもや高齢者という括りはありません。ケアラーが抱える悩みはさまざまであるため、地域全体の課題として考える必要があります。

ケアラーの皆さんがどのようなことで悩み、生活の中に課題を抱えているのかを明らかにしたい。そして、行政と町民、企業や団体も含めた多くの方が連携することで地域で支え合う「まち」になると思います。今後も取り組みを推進していきます。

町のケアラー支援の中心となっている吉田さん。北海道のほか長崎県でも有識者として携わっている